

高知
県立美術館

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no. 116

2023. winter



THE 新版画 版元・渡邊庄三郎の挑戦

2023(令和5)年1月28日[土]—3月19日[日] 会期中無休

高橋弘明(松亭)《白猫》大正15年(1926)渡邊木版美術画舗蔵

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

THE 新版画

版元・渡邊庄三郎の挑戦

「新版画」は大正から昭和のはじめ頃に生まれた版画のジャンルです。明治時代以降、石版画などの近代的印刷技術の台頭に押されて衰退していた江戸時代の浮世絵の手法を復活させ、その古くからの技術を用いて新しい時代の版画芸術を作ろうと、渡邊庄三郎が創始しました。ここでいう浮世絵の手法とは、絵師・彫師・摺師という3人の職人と、版元（プロデューサー）が協力して1枚の木版画を作り上げる制作システムのこと。それぞれの工程を専門の職人が担当し、その技は目を見張るものがあります。そして新しい表現を開発していくにあたり、そのまとめ役である版元・渡邊庄三郎のプロデュース力が非常に重要な役割を果たしました。今回の展覧会では、優れた技術とプロデュースの妙の結実である「新しい」版画表現をお楽しみいただけます。浮世絵のようでありながら浮世絵とは一味違う、今の眼にも新しい絵画表現をぜひご覧ください。

文・中谷有里（当館主任学芸員）

渡邊庄三郎とは？

「新版画」を創始した木版画プロデューサー。庄三郎は浮世絵商として木版の彫りや摺りの技術、魅力を学び、浮世絵の複製画の研究も手掛ける中で、浮世絵の魅力を有する木版画を、新時代の価値観の中で作り直すことを構想しました。その構想を実現するため、当時活躍中の日本で展覧会を開いていた外国人画家をはじめ、日本人の若手日本画家や洋画家など様々なアーティストに声をかけ、一緒に表現を探求する仲間を集めました。今でも古美術の研究者がその知識を導きとして現代アーティストたちと新たな作品を作る…ということがあります、庄三郎の取り組みは、まさにそれを彷彿とさせる意欲的でパワフルな取り組みだったと言えます。

新版画とは？

江戸時代の浮世絵と同じ手法を使いながらも、古い版画の複製ではなく、「新しい」時代の世相やマーケットにも通用する芸術を追求したことが新版画の特徴です。描かれる風景や人も渡邊が生きた新しい時代をモチーフとしているものがほとんど。そして版下絵を描いた絵師も、水彩画を描く外国人画家、日本人の日本画家、洋画家と、明治時代以降に盛んになった新ジャンルのアーティストたちでした。この取り組みの中で、それまでにはなかった「ざら摺り」などの新しい版画技法も生み出されました。



屏風の左に描かれたグレーの背景や、女性の赤い襦袢に引っ掛けられたような線の跡が残っています。このようなバレン跡をわざと残す「ざら摺り」は庄三郎が考案しました。版下絵の作者、カベラリはオーストリア出身の画家。デパートの展覧会でカベラリの水彩画を見た庄三郎が新版画と一緒に作るべくスカウトしたそうです。

フリッツ・カベラリ《黒猫を抱く女》
大正4年(1915)

※画像は全て渡邊木版美術館蔵



川瀬巴水《清洲橋》昭和6年(1931)



小早川清《舞踏》昭和9年(1934)



川瀬巴水《上州法師温泉》昭和8年(1933)



山村豊成《花園の花 十三代目森田勘彌のジャン・バルジャン》
大正10年(1921)



庄さん
展示室でお会いしましょう。



バレンくん
僕は版画を擦る時に重要な道具、バレン。
展示作品のチチ情報をつぶやくよ。展示室でも僕を見つけてね。

2023(令和5)年1月28日[土]—3月19日[日]

9:00-17:00(入場は16:30まで) 会期中無休 会場=高知県立美術館 第2・3展示室

観覧料=一般当日1,200円(960円)、大学生850円(680円)、高校生以下無料

*内は20名以上の団体料金。※年間観覧券所持者は無料。※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

主催=高知県立美術館(公益財団法人高知県文化財団)、KSSさんさんさんテレビ 特別協力=株式会社渡邊木版美術館 記念協力=株式会社アートワン 後援=高知県教育委員会、高知市教育委員会、高知新聞社、NHK高知放送局、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送

Exhibition Information - 02

New Acquisitions from the Museum Collection 新収蔵品を中心に

本展では、2020~21年度に当館のコレクションに新しく加わった作品をご紹介します。ここでは、中でもお勧めの作品についてご紹介。ジャン・ティンゲリー(1925-91)という作家をご存知でしょうか。スイス生まれで、フランスで「ヌーヴォー・レアリズム」という美術運動に参加し、その中心的なアーティストとして活躍しました。彫刻家のニキ・ド・サンファルのパートナーとしても知られていますが、二人が共同で制作した《自動人形の噴水》を、パリのポンピドゥーセンターの隣のストラヴィンスキイ広場にある噴水といえば思い出す方もいるでしょう。

ティンゲリーは個展の開催等で度々来日しています。1963年、たまたま東京に滞在していた高知の画家・濱口富治は、日本橋の画廊でティンゲリーと出会い、意気投合してお互いの作品を交換します。この度当館に収蔵された作品は、そのティンゲリーのドローイングに、濱口のティンゲリー宛ての手紙の下書きや親交のあった美術評論家・瀧口修造の写真を組み合わせて額装したもの。高知の現代美術の旗手であった濱口の若き日の思い出として、長らく濱口家に飾られていたそうです。

文・奥野克仁(当館副館長兼学芸課長)

主な出品作家
山本昇雲、竹崎和征、日和崎尊夫、
野見山暁治、本城直季、濱口富治、
ジャン・ティンゲリー

2023年1月12日[木]—2月23日[木・祝]
1階第4展示室
9:00-17:00(入場は16:30まで)会期中無休

29th 開館記念日報告

11月3日、当館は開館29周年を迎えました。当日は入館無料に加え、開催中の企画展のスペシャル・トークが開催されました。角田和夫展アーティスト・トークでは、日頃から角田さんを応援する地元の方々を中心に、60名を超える方が参加されました。作品の前で、写真を始めたきっかけや撮影当時の様子などを語る角田さんに参加の方々は熱心に耳を傾けていらっしゃいました。

また合田佐和子展のクロストークでは、企画者である当館塙本学芸員と三鷹市美術ギャラリーの富田学芸員が、展覧会企画の裏話をじっくりと語り合いました。



MUSEUM HABb INFO

美術館ホール 報告

高知ライブエール・プロジェクト

「KOCHI ADATAN film Festival 高知あだたん映画祭」

●2022年7月2日(土)~9月4日(日)

「あだたん」という言葉をご存知でしょうか?あだたんとは「(器に)収まりきれない」を意味する土佐弁です。そんな言葉がぴったりな、映像表現の多様性を味わう映画祭を7~9月にかけて、高知市(高知県立美術館ホール)、須崎市(すさきまちかどギャラリー/旧三浦邸、須崎市立市民文化会館)、大月町(大月町農村環境改善センター、大月町COSA)で開催しました。当館ホールでは“オルタナティブ・マスター・ピース”と題し、映像作家の中島崇氏による解説を交えながら実験映画の重要作品を上映。2台の映写機で2面スクリーンに投影する稀少な上映も行いました。須崎市では“身体と映像”をテーマに、原将人、吉開菜央、甫木元空、池添俊の作品上映の他、監督によるトークなど多彩な催しを実施。伝説的監督から新進気鋭の若手監督の作品が揃う貴重な機会に、須崎市内外から足を運んでいただきました。大月町では“アニメーション”をテーマに開催。上映以外にもアニメーション作家の水江未来によるコマ撮りアニメーションワークショップやトーク、山村浩二と矢野ほなみによるオンライントークなどイベントも盛り沢山で、子どもから大人まで幅広い層の方々が楽しかったようでした。須崎市と大月町では



地元の方々が主体となって企画・運営され、3ヵ所それぞれに特色がある、まさに“あだたん”映画祭となりました。ご参加いただいた皆様、関係者の皆様、どうもありがとうございました。

文・秦泉寺なほ(当館企画事業課)



上段左/
美術館ホールでは映写機二台で上映
上段右/
大月町でのコマ撮りアニメーションワークショップ
下段/
須崎会場での池添監督トークでは
聞き手として当館塚本学芸員が登壇

高知ライブエール・プロジェクト

「サクソフォーン四重奏団 クワチュール・バー 結成15周年記念コンサート」

●2022年8月27日(土) 14:00 美術館ホール ●2022年8月28日(日) 14:00 佐川町立「桜座」

クワチュール・バーとの出会いは、2008年に当館を拠点に開催された地域創造の『公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業』。この事業は、演奏家が普段触れ合う機会の少ない子どもたちに生演奏を届けるというものでした。彼らは高知に長期滞在し、出前クラシック教室の内容を悩みながら決め、それぞれの市町村で実施。各地のホールでコンサートも開催しました。素敵なお兄さんの彼らは教室の人気者で、休み時間に子どもたちと遊ぶ姿が印象的でした。その後、何度か高知でコンサートは開催していたものの、美術館ホールでは10年のブランクが。「15周年記念なので、高知でコンサートできたら嬉しいな」の声で実現した今回のコンサートは、思い出の場所である佐川町の桜座とそれぞれ異なるプログラムで実施しました。成熟した演奏はもちろん、人柄の良さが溢れるトークも楽しく、待ちわびていたお客様は大満足。うしお幼稚学園の子どもたちに来てもらってスペシャル教室も実施し、若いファンも獲得!クワチュール・バーとして活動間もない頃から音楽の伝え方に真摯に向き合う姿、そしてそれを模索して辿り着いた彼らならではのステージを見ることができ、担当として幸せな学びの時間を過ごしました。また、彼らが連日、懐かしい顔ぶれとの再会を喜ぶ姿からは、ホール事業を長く続けることのご褒美を感じました。音楽はもちろん、ホールが人との交流の場であり続けるよう、これからも出会いを大切にしていきたいと思います。 文・山脇有美(当館企画事業課)



スペシャル教室に子どもたちは興味津々

心のこもった調べで会場を満たしました

結成15周年を祝うバルーンの贈り物がコンサート当日に華を添えました

学校連携紹介 ART

当館では、学校と美術館、子どもたちとアートをつなぐスクールプログラムを行っています。学校へ学芸員が出向いて授業を行う「出前びじゅつ講座」では、美術館や学芸員の仕事、来館時のマナーを学び、また当館コレクションの鑑賞を通して、子どもたちの考える力を育みます。例えばシャガール作品の鑑賞では、大人も思いつかないような子どもたちの発想力に驚かされました。また、土佐市ゆかりの写真家である石元泰博さんの魅力をもっと知ってもらうために、ピンホールカメラの作成や撮影体験等も実施。自作のピンホールカメラで外を見た瞬間、「すごい!」「見える!」と子どもたちから歓声が上がりました。後日行った美術館見学では、学芸員の案内を受けながら、開催中の様々な展覧会を鑑賞しました。事前授業で紹介された作品を前にすると、「思ったより大きかった。」「線が細かい。」といった、本物の作品ならではの感想が多く出ました。「また、美術館に行きたい。」そんな子どもたちの声はとても励みになります。ぜひ、お気軽にご来館ください。

文・上野穂(当館学芸課主査)

